

報告　鞠智城跡の調査と成果（鞠智城「繕治」について）

報告者紹介

矢野 裕介（やの ゆうすけ）

同志社大学文学部卒業。熊本県文化課を経て、現在、熊本県立装飾古墳館「歴史公園温故創生館」文化財整備交流課長。鞠智城発掘調査に従事。

報告 「鞠智城跡の調査と成果（鞠智城「繕治」について）」

矢野 裕介（熊本県教育委員会）

はじめに

皆さんおはようございます。熊本県教育委員会の矢野と申します。私のほうからは、「鞠智城跡の発掘調査と成果」についてご報告させていただきます。

さて、本日のシンポジウムは、「律令国家の確立と鞠智城（六九八年「繕治」の実像を探る）」というテーマのもとで開催させていただいています。この「繕治」につきましては、『続日本紀』文武二（六九八）年五月の条に、「大宰府をして、大野、基肄、鞠智の三城を^{せんち}繕治せしむ」という記述がありまして、これは、今の九州地方のことですけれども、当時の西海道の国々の統括、そして外交、軍事の役割を担つております。この鞠智城の「繕治」の歴史的な背景や意義を探っていくのが、本シンポジウムの趣旨となります。

そこで私のほうからは、昭和四二年から続けている発掘調査の成果から、鞠智城の「繕治」について見て見たいと思っていますので、どうぞよろしくお願ひします。

一、鞠智城跡の概要

鞠智城は、その『続日本紀』文武二年五月の条を初見といたしまして、その後も『日本文徳天皇実録』『日本三代実録』に記述のある、国史記載の城になります。

『日本文徳天皇実録』『日本三代実録』の記述につきましては、平安時代に入つてからのことですが、いずれも「兵庫」、これは、武器を納めていた倉のことをいうのですが、そこに置かれてあつた「鼓」、あるいは兵庫の「戸」、これは扉のことですが、それらが自ら鳴つたという奇怪な現象が鞠智城で起きたとするものです。そのうち、『日本文徳天皇実録』のほうには、その奇怪な現象の後、「不動倉十一宇火く」とあります、「不動倉」とは、米を備蓄していた倉のことですが、それが一棟火災に遭つたということが、記録として残っています。

『日本三代実録』の記述を最後に、鞠智城に関する記録は途絶えるわけですけれども、「繕治」してからそれまでの間、少なくとも一八一年間は存続したということが、こうした国史の記述からも分かるかと思います。

次に、鞠智城築城の歴史的背景についてお話をしたいと思います。

七世紀後半の朝鮮半島には、高句麗、百濟、新羅という三国が、半島の統一をめぐつて争っていたわけですが、西暦六六〇年に、新羅が中国の



矢野 裕介 氏

唐と連合して、百濟を滅ぼす事態が生じます。当時、百濟と親交の深かつた日本は、百濟の要請に応じて朝鮮半島に援軍を送ることになりますが、西暦六六三年に、錦江河口近くに推定されている「白村江」というところで、唐・新羅の水軍と戦いまして、圧倒的な兵力の差により大敗してしまいます。その敗戦により、次は日本が唐・新羅によつて攻められるという危機的な状況になります。中央政府は西日本各地に城を配置し、必死の防衛網を築くこととなります。その時に築かれた城のうちの一つが、鞠智城になります。

現在、鞠智城跡のような古代の山城は、西日本で二三城が確認されており、最前線となる対馬に金田城があり、北部九州に大野城、基肄城などの城が配置され、さらに瀬戸内海沿岸に配置されるなど、都があつた畿内に至る外敵の予想進行ルート上にその分布が認められます。そのうち鞠智城は、阿蘇の北外輪山から西の有明海へと流れている菊池川の中流域、河口から直線距離で三〇キロメートルほど内陸に位置しています。福岡県との県境に筑肥山地という一〇〇〇メートル級の山がそびえる山地がありますが、その中でも最も高い八方ヶ岳、標高一〇五二メートルの山の南西側の丘陵地帯の南端近くに位置する、中心標高一四五メートルほどの通称「米原台地」^{よなばる}という台地状の低丘陵上に立地しており、南には、菊池川沿いに形成された肥沃な平野が広がっており、県下でも有数の穀倉地帯を形成しています。

この鞠智城跡の範囲ですが、現在、周長三・五キロメートル、面積五五ヘクタールの範囲を真の城域として、それを含む六四・八ヘクタールが国の史跡に指定されています。行政区分でいいますと、山鹿市と菊池市のちょうど市境に位置しています。周辺には、城の北西方向に、大同一（八〇七）年に、山城国、現在の

京都府ですが、その葛野郡の松尾神を勧請したと由来されている「城野松尾神社」が所在し、さらに西の盆地内には、古代の条里地割が推定されています。

鞠智城跡では、昭和四二（一九六七）年度の第一次調査から、平成二三（二〇一〇）年度までに三三次を数える調査を行つてきました。これまでに、城域南縁の深迫ふかざこ、堀切、池ノ尾という三カ所の城門跡や、外郭線上の西側土壘線、南側土壘線からは、朝鮮半島から伝来してきた、版築ばんちくという工法で築かれた土壘跡が見つかっています。また、城内の施設では、城の中心部となる長者原・上原地区から七二棟にも及ぶ建物跡が見つかっており、長者原地区の東側には、国内の古代山城では唯一となる八角形の建物跡が、南北五〇メートル離れた間隔で見つかっています。また、長者原地区の北側から上原地区の北側にかけて、コの字型の配置をした建物群が見つかっていますが、これは城の「管理棟的建物群」に位置づけられています。その長者原地区的北側谷部からは、貯水池跡も見つかっています。

出土遺物は、須恵器・土師器などの日常什器のほか、銅造菩薩立像や百濟系の单弁八葉蓮華文軒丸瓦、「秦人忍口五斗」と墨で書かれた木簡（秦人の忍という人が米五斗を納税したということを表す）、平鍬・横槌などの木製品も見つかっています。中でも、銅造菩薩立像については、七世紀中ごろの百濟で造られたと考えられており、鞠智城築城の歴史的背景を物語る貴重な資料になります。

二、鞠智城跡の時期区分と変遷

鞠智城跡は、これまでの調査研究によりまして、七世紀後半から一〇世紀の中ごろ、平安時代まで存続し、その間、五期にわたる時期区分と変遷が明らかになつています。この鞠智城の時期区分と変遷について、見ていただきたいと思います。

まず、鞠智城Ⅰ期、これは鞠智城の創建期になりますが、七世紀の第3四半期から第4四半期の間に比定されています。これは、白村江の敗戦直後、外郭線上に城門、土壘を築き、城内に掘立柱の倉庫や兵舎、そして貯水池などを設置するなど、城としての最低限の機能を緊急に整備していった段階になります。

鞠智城Ⅰ期の遺構としては、まず、堀切門ですが、阿蘇溶結凝灰岩の崖地を掘り切つて道を通し、その途中に、門の支柱穴の跡が見つかっています。次に、池ノ尾門ですが、約九・六メートル幅の石積みの城壁、石墨があつたことがわかつており、その背面、城内側に石積みの跡が見つかっています。次に、西側土壘線では、高さ三メートル程の土壘が見つかっており、その裾に土留めのために石を並べていたことが分かっています。また、貯水池跡では、建築材、木製品などを水漬けして保管した貯木場跡も見つかっています。

続いて、鞠智城Ⅱ期ですが、七世紀末から八世紀第1四半期前半の時期になります。この時期に、先ほどお話ししました、長者原地区の北側に、コの字型に配置された「管理棟的建物群」が出現します。その南に、八角形建物や総柱の倉庫群を配置するなど、城の施設が最も充実した段階になります。約五〇メートル離れ南北に配置された八角形建物は、南側のほうは、心柱を中心に柱が三重に廻り、北側のほうは、心柱を中心

に二重に廻るなど、構造上の違いが認められます。

次に、鞠智城Ⅲ期ですが、八世紀の第1四半期後半から第3四半期までの時期になります。おおよそ奈良時代にあたりますが、この時期になると、小さな礎石を使った礎石建物が出現します。もう一つの特徴として、この時期の土器が出土していないということで、土器の空白期間にあたることから、城の維持管理において、必要最小限の人員を配置したのではないかと考えられます。

次に、鞠智城Ⅳ期です。八世紀第4四半期から九世紀第3四半期まで、平安時代の前期にあたる時期になります。この時期になると、先程の管理棟的建物群がなくなるとともに、貯水池中央部の埋没が始まるなど、池の機能が低下するようになります。その一方で、大型の礎石を使うなど、礎石建物が大型化するのが特徴として挙げられます。城の機能として、食糧などの備蓄機能が主体となるのではないかと考えられています。

最後に、鞠智城Ⅴ期ですが、九世紀第4四半期から一〇世紀第3四半期までの時期になりますが、鞠智城の終末期になります。この時期、建物の棟数が少なくなりますが、建物規模の大きな礎石建物が出現するなど、食料の備蓄施設としての機能は存続していたようです。そして一〇世紀の中ごろに廃城を迎えることとなります。

三、鞠智城「繕治」の様相

以上が、鞠智城の五期にわたる変遷ですが、このうち、『続日本紀』文武二年の鞠智城「繕治」の記述は、鞠智城Ⅱ期の段階にあたります。Ⅱ期の特徴については、鞠智城Ⅰ期の建物群とは異なる主軸方向を持つ管理棟的建物群が出現し、その南側に八角形建物、総柱の建物を配置するなど、先程もお話ししたとおり、城内の施設が最も充実する段階になります。そして、もう一つは、この時期の日常什器となる土器の出土が很多多いということが特徴として挙げられます。これは、城の維持管理に多くの人員が配置されたものと考えられます。

こうしたことから、鞠智城「繕治」は、単なる城の補修・修理として捉えられるものではなく、城の役割・機能、そして管理運営の変化に伴い、城の修理・補修がなされたものと、現在考えているところです。

おわりに

鞠智城跡の変遷については、鞠智城Ⅲ期までは、大宰府とその周辺の変遷とほぼ連動しており、このことは、少なくともその時期まで、鞠智城が大宰府との密接な関係のもと機能していたことを示すものと言えます。鞠智城「繕治」の問題については、このことも踏まえて考えていく必要があろうかと思っています。

以上で、私のほうからの報告を終わりたいと思います。ご清聴、どうもありがとうございました。